

伝え合い、分かり合う関係をめざして

一人一人の子供の将来の生活につながる
コミュニケーション指導の取り組み

研 究 基 調



平成10年1月

鹿児島大学教育学部附属養護学校

はじめに

～啐啄同時の関係をめぐって～

校長 久留 一郎

本校では、一人一人の子供たちの個性を大切にしながら、それぞれが能力や適性を最大限に発揮し、将来の生活を主体的に生きる力を育む教育を実現するために、暗中模索の努力をしているところでございます。私は、今日、教育に求められている「生きる力」とは、子供たちが周りの人々との関係の中で「共に生きる力」とであると、考えています。人が自己の能力や適性を発揮しながら自己実現を図る多くの場面においては、そこにかかわる相手が存在します。したがって、「生きる力」は個人内の力にとらえるだけでなく（と同時に）、子供を取り巻く人との関係の中で発揮される力にとらえるべきではないかと考えるわけです。

このたび、「一人一人の子供の将来の生活につながるコミュニケーション指導の取り組み」の研究主題の下、ささやかながら本校の研究成果を発表しました。この研究は、子供たちとの間に「伝え合い、分かり合う関係をめざして」、それを実現することを目標にしております。よって、本校の研究は、まさに「共に生きる力」を育む教育実践研究ではないかと自認するところであります。今回の研究の基盤となりました、昭和61年からの研究テーマ「かかわり合いの豊かな子供をめざして」から重ねますと、本校は、12年も「共に生きる力」を育む発達援助のあり方を探っていることとなります。その中で、未だに結論めいた答は得られない状態です。

今回の研究においては、かかわり手としての教師のありようはもちろんのこと、母親を中心とした家族のありようも探究し、子供との関係性の深化に当たってまいりました。その過程では、保護者や子供と共に子供の将来の生活を思い描き、その姿に近づくべく長期、短期の目標を設定し、アプローチの際の具体策も考え、家庭と連携した取り組みができました。4年間の研究のまとめに当たって、わたしたちは「生きる力」を育む援助者側の「生きる力」の重要性を再認識させられています。子供たちと援助者の「生きる力」が、相補的相乗的に高まったときに、私たちが目指す「伝え合い、分かり合える関係」に近づけると考えます。このことは、「啐啄同時」の関係（“啐”は鶏の卵がかえるとき、殻の中で雛がつつく音。“啄”は母鶏が殻をかみ破ること。その両者の「呼応的關係」のありよう）ともいえます。

ここに、研究の一端を発表しますが、まだまだ不十分な内容に留まっている状態ですので、この研究に対する御意見や御指導をお寄せくださると幸いに存じます。最後になりましたが、今回の公開研究会に際し、講演を快くお引き受けくださいました筑波大学の長崎勤先生をはじめ、御後援をいただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、さらには研究の推進に当たり、絶えず懇切な御指導をいただいた諸先生方に深く感謝の意を表します。

平成10年1月30日

総 目 次

はじめに 校長 久留 一郎

理論編 1

資料編 13

おわりに 副校長 宮原 幹治